

令和 6 年 5 月 13 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K06546

研究課題名（和文）近世城下町町人地における水系の設計論理に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Study on the Design Logic of Waterways in Early Modern Castle Towns

研究代表者

阿部 貴弘（ABE, Takahiro）

日本大学・理工学部・教授

研究者番号：90549445

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世城下町における濠や掘割などの水系の設計論理を解明するため、「正保城絵図」が現存する城下町（62都市）を分析対象として、まず、濠及び掘割の配置や平面形態、想定される機能等の分析から、水系の開削位置決定にあたっての基本的な考え方を整理した。そのうえで、城下町の立地や地形特性を踏まえ、濠及び掘割の水源や導水方法（水の回し方）の視点から城下町を類型化し、類型間の比較分析に基づき、水系の役割を加味して、類型ごとに、濠及び掘割の機能や造成技術、さらに造成上もしくは利用上の得失（メリット・デメリット）について考察し、各類型における設計論理の特徴を明確化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国の主要都市の多くは、近世城下町の都市構造を受け継いでいる。しかし、諸分野における長年の研究にもかかわらず、史料の欠如を主要因として、近世城下町がいかなる論理に基づき設計されたのか、その全体像は未解明のままである。特に近世城下町の存立基盤の一つである濠や掘割などの水系の設計論理については、いまだ研究成果の蓄積に乏しい状況にある。本研究は、史料の欠如を補うべく新たな方法論を提示するとともに、その方法論に基づき、近世城下町における水系の設計論理の一端をインフラ整備の視点から明らかにした。これらは、近世城下町の都市設計論理の全体像の解明に寄与する、社会的及び学術的意義の大きい研究成果である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to understand the design logic of water systems such as moats and canals in early modern castle towns. In this study, 62 castle towns for which the “Shoho Castle Drawings” are still extant were selected for analysis. First, we analyzed the layout, planform, and function of moats and canals, and summarized the basic concepts used in determining the location of water system excavations. Then, based on the location of the castle town and its topographical characteristics, we categorized the castle town from the viewpoint of the water source of the moat and canal and the water-conducting method. Furthermore, based on a comparative analysis of the categories, we identified the functions of the moat and dugouts, the development techniques, and the advantages and disadvantages in terms of development and use, and clarified the characteristics of the design logic for each category.

研究分野：都市史

キーワード：近世城下町 設計論理 水系 町割 地形

### 1. 研究開始当初の背景

我が国の主要都市のほとんどは、奈良や京都、鎌倉などの古都を除き、近世城下町の都市構造を基盤として発展してきた。その近世城下町は、水路網と街路網が複雑に入り組んだ、まさに「水都」と呼ぶにふさわしい日本独自の大変興味深い都市構造を有していた。

こうした近世城下町の設計論理の解明はきわめて魅力的な研究テーマであり、これまで歴史地理、都市史、建築史、日本史、考古学などの諸分野において、長年にわたり研究が行われてきた。しかし、それらの研究において、設計論理の全体像を説明する十分な研究成果が得られているとは言い難い。なかでも、近世城下町の基盤を形成する重要なインフラである濠や掘割などの水系の設計論理については、未解明な点が少なくない。その要因として、以下の2点を指摘することができる。

まず、伊藤<sup>1)</sup>や玉井<sup>2)</sup>も指摘するように、近世城下町がどのような論理で設計されたのか、設計論理について直接的に記述した史料はきわめて少なく、設計論理の全体像を解明するためには、近世の文献資料を中心とした研究には限界がある。そのため、設計論理の解明に向けて、これまでに分析対象とされてきた既存の文献資料にとどまらず絵図や地図等も含め、さらに近世のみならず近現代も含めた、多面的・縦断的な史料分析とそれに対応した分析方法論の構築が必要である。

次に、仮に城下町の計画・設計段階を表-1のように整理すると、建築史や都市史の分野における既往研究では、「立地」や「基本構想・基本計画」、あるいは「街区の計画・設計」段階を対象とした研究が中心で、城下町の「基本設計・実施設計」段階を対象とした研究は十分には行われていない。

「基本設計・実施設計」段階では、水路や街路、下水路等のインフラ整備が、町割に大きな影響を及ぼしていたと考える。そうしたインフラは、無論、期待される機能(性能)を発揮することを一義的な目的として設計されたはずである。すなわち、城下町の設計論理を解き明かすためには、インフラが担う機能を加味しつつ、町割とインフラ整備との関係を総合的に読み解く必要があり、これまでにはない土木史的な視点から研究を実施する必要がある。

こうした課題を踏まえ、これまでに、近世城下町の設計論理を解明するための分析方法として、近代測量図の地図計測による定量的分析を中心とした地図・絵図史料分析という新たな方法論を構築し、さらにこの方法論を用いて、近世城下町の設計論理を解き明かすことに成功した。

その要点は、以下のとおりである。

- 主要街路や掘割運河といった都市活動を支える主要なインフラを町割の基軸として配置し、その両側に等しい奥行を持つ宅地を配置する。これが、街区の基本モジュールに先行する町割のモジュールの最小単位となる。
- 町割の基軸は、中世以来の街路や排水勾配を確保するための微地形、または交通結節点間の接続といった、先行基盤や先行条件に配慮して配置する。
- 町割の基軸には優先度の違いが存在し、こうした優先度の違いが宅地の間口方向や街路の配置に影響を及ぼす。

しかし、これまでの研究成果には、以下に述べるように、濠や掘割などの水系の設計論理に関する課題が残されており、新たな研究展開が必要であった。

### 2. 研究の目的

近世城下町における水系の設計論理については、これまでの研究により、濠及び掘割の開削手法や町割との関係を明らかにすることができた。それらを要約すると、まず、開削手法については、1) 陸地部に開削する「陸地掘り込み整備型」、2) 河川河口部や海岸線の埋め立てに際しての「埋め残し整備型」、3) 低湿地等の造成と排水のための「浚渫整備型」に類型化することができ、近世初期には「陸地掘り込み整備型」(たとえば江戸の日本橋川や京橋・銀座地区に隣接する外濠など)及び「埋め残し整備型」(たとえば江戸の日本橋堀留や三十間堀など)の開削が多いが、時代が下るにつれ、徐々に「浚渫整備型」(たとえば大坂の下船場地区の堀川や江戸の江東地区の掘割運河など)が普及することを明らかにした。さらに、これらは町割の基軸として位置付けられ、沿川の宅地とセットで開発されたことを明らかにした。

しかし、濠及び掘割の開削位置や延長・幅員、さらに水路網のネットワークの考え方など、水系の設計論理に関しては未解明な点も少なくない。

表-1 城下町の計画・設計段階と計画・設計要素

計画・設計段階	計画・設計要素
立地	城の位置(平城、山城、海城)と城下町の配置
	街道との位置関係
	海運路・舟運路との位置関係
基本構想・基本計画 マスタープラン (城下町の平面形態)	土地利用(城、武家地、町人地、寺院)
	街道(主要街路、メインストリート)位置の概略(タテ・ヨコ)
基本設計・実施設計	舟運路、排水路(掘割運河・堀川)位置の概略
	宅地及び街区モジュール、水路モジュール
	設計標準(街路幅員、水路幅員、浜地/河岸地幅員、下水路幅員)
	街道(主要街路、メインストリート)の配置位置の詳細
	舟運路、排水路(堀川/掘割運河)の開削位置の詳細
	町割の基点・基軸
	下水路網
	上水網
街区の計画・設計	設計単位
	開発手法・開発過程
	屋敷割(間口方向)、町屋敷
	新道

水系の設計論理について直接的に記述した近世の一次史料が遺されていない以上、こうした点を解明するためには、以下の通り、これまでにはない新たな方法論を構築する必要がある。

近世城下町の水路網は、町人地の基盤を形成する重要なインフラであり、水運路としての交通機能のみならず、近代下水道が発達していない時代における雨水排水や降水貯留といった重要な治水・防災機能、さらにいわゆる城郭周りの濠に見られる防御機能など、実に多面的な機能を担っていた。インフラの機能はすなわち整備目的に他ならず、つまり水路網の機能面に着目した分析により、水系の設計論理を解明することができると考える。ところが既往研究では、交通機能に着目した研究は行われているものの、それらの研究から水系の設計論理の解明に至る十分な研究成果は得られていない。また、土木史の分野においても、大河川における近世の治水技術に関する研究は行われているものの、城下町の水路網の治水機能等に着目した研究は十分には行われておらず、設計論理の解明に資する研究成果は得られていない。

一方、個々の城下町において都市設計論理に関する史料が限られている以上、その解明に向けて、城下町間の相互比較に基づく類型学的アプローチが有効な手段の一つであると考えられる。

そこで、本研究では、近世城下町の都市設計論理の全体像を明らかにすることを念頭に、濠及び掘割などの水系の設計論理の解明に向けて、水路網の機能面等に着目しつつ、まず、近世城下町を類型化し、そのうえで、類型間比較に基づき近世城下町における水系の設計論理を解明する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究対象

本研究では、1644（正保元）年に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の絵図である「正保城絵図」が現存する城下町を分析対象とする。

正保城絵図には、城郭の建造物や城下町の町割のほか、河川や濠、掘割の位置及び形状、幅員、水深、さらに石垣の高さなどの諸情報が、一定の表現方法のもとで詳細かつ精密に描かれており、近世初期の城下町の都市構造を把握するうえで、比較的均質なデータを得ることができる貴重な史料である。

正保城絵図は、幕末には紅葉山文庫の蔵書目録に131 鋪の所蔵が記録されていたが、現在は国立公文書館に63 鋪のみ所蔵されており、本研究では、このうちデジタルアーカイブから確認可能な62 鋪（都市）を分析対象とする。

#### (2) 分析資料

分析には、1)「正保城絵図」(図-1)をはじめとする各城下町の近世の絵図のほか、2) 国土地理院が提供するDEM（数値標高モデル）データから30cm（およそ1尺）ごとに等高線を発生させた「等高線図」(図-2)、さらに、3) 国土地理院が提供する「治水地形分類図」を用いる。

分析にあたっては、まず、「正保城絵図」を用いて、濠及び掘割の配置や平面形態、想定される機能等を把握する。また、その他の絵図を用いて、濠及び掘割の変遷を確認する。次に、「等高線図」を用いて、城下町の立地や地形特性、濠及び掘割の相対的な標高差等を把握する。なお、等高線図の標高は現在の測量データを用いていることから、明治以降の埋め立てや宅地造成等の大規模な地形の変化に配慮して分析する。さらに、「治水地形分類図」を用いて、土地の成り立ちや地形特性等を把握する。

#### (3) 分析視点

分析にあたっては、まず、濠及び掘割の配置や平面形態、想定される機能等の分析から、地形との関係における水系の開削位置決定にあたっての基本的な考え方を整理する。

そのうえで、こうした基本的な考え方にに基づき、即地的に、どのような論理で水系の設計が行われたのかを明らかにするため、城下町の立地や地形特性を踏まえ、1) 濠及び掘割の水源、2) 水源から、もしくは濠及び掘割間の導水方法（水の回し方）に着目して城下町を類型化する。さらに、類型間の比較分析に基づき、水系の役割を加味して、類型ごとに、濠及び掘割の機能や造成技術、さらに造成上もしくは利用上の得失（メリット・デメリット）について考察し、各類型における設計論理の特徴を明確化する。

なお、個々の城下町においては、いわゆる城郭エリアと城下町エリア（武家地や町人地など）で異なる類型となることも想定する。

### 4. 研究成果

#### (1) 水系の機能と配置との関係

正保城絵図をはじめとする絵図の分析に基づき、近世城下町における水系の機能として、「内濠」「外濠」「その他の舟運路」に大別することができた。それぞれの開削位置決定にあたっての基本的な考え方は以下のとおりである。



図-1 正保城絵図(例)(出羽国米沢城絵図)



図-2 等高線図の例(米沢城跡周辺)

内濠は、城郭を防衛するために開削される濠であり、設計にあたっては、城郭防衛の論理（縄張り）が最優先され、そのため地形条件を加味しつつも、防衛の論理から時には大規模な地形改変を伴うような設計がなされており、それらは城下町建設当初からの変化はなく、設計論理と水害との関係や設計論理の時系列的変化は見出せなかった。

外濠は、内濠と同じく防衛の役割を持つ濠であるが、その開削位置については各城下町によって違いがあり、特に城下町の立地に大きな影響を受けていた。また、外濠は、防衛の論理に配慮しつつも、地形条件を加味した効率的な設計がなされていた。こうした外濠の建設にあたっては、河川の付け替えを伴う城下町もあり、治水を加味した設計がなされていた可能性が把握できた。加えて、内濠と異なり外濠は、防衛のみならず、武家地と町人地の境界としての役割や、舟運路および排水路としての役割も担っていたが、城下町建設当初から大きな変化はなく、時系列的変化は認められなかった。

その他の舟運路については、地形および町人地との関係が開削位置に大きな影響を及ぼしており、地形との関係では、おもに微低地に舟運路が開削され、地形に則った効率的な設計がなされており、また、町人地との関係では、各舟運路とも町人地の主要街路とのアクセスに配慮した設計がなされていた。これらの舟運路の設計論理と水害との関係は見出すことができなかったが、一方、城下町の拡張に伴い開削された舟運路は、町割と整合して開削されたものもあり、設計論理の時系列的変化の可能性が把握できた。

## (2) 水系の設計論理

正保城絵図及び現代の等高線図等を用いた分析に基づき、濠及び掘割運河に着目して、近世城下町の類型化を試みた。その結果、「Ⅰ. 空濠・濠無し型」「Ⅱ. 棚濠型」「Ⅲ. 河川活用例」「Ⅳ. 水面引込型」の4類型、さらに細分類を含めると全7類型を見出すことができた(表-2)。以下、類型ごとに水系の設計論理の概要を整理する。

### ① 空濠・濠無し型

山地に立地するいわゆる山城の城下町で、いわば“高地防御都市”である。これらの城下町では、濠や掘割を設けない、もしくは設けたとしても空濠のみであるが、城下町エリアには、自然河川やため池等から用水を導水することもある。

### ② 棚濠型

舌状台地の突端部や河岸段丘上に立地する城下町で、いわば“高台利水都市”である。これらの城下町では、小河川や谷地を堰き止め、ため池を造成し、それらを水源として棚田状に濠や掘割を配置し、その高低差を利用して水を回す。また、濠や掘割を下流の低平地(城下町エリアや農地)の用水源としても利用する。なお、水源を得られない濠は、空濠とすることもある。

### ③ 河川活用例

盆地や扇状地、三角州や氾濫平野などの低平地に立地する城下町で、いわば“低地舟運都市”である。これらの城下町では、河川を濠や掘割の水源として活用し、さらにそれらを下流の低平地(城下町エリアや農地)の用水源としても利用する。

河川活用例は、水源である河川からの導水方法によって、「河川転用型」、「旧河道型」、「分水型」に細分類できる。河川転用型は、河川をそのまま濠や掘割として活用する。旧河道型は、河川を付け替え、付け替え後の旧河道を濠や掘割として活用する。分水型は、近傍の河川から分水して濠や掘割を形成する。なお、水源として活用する河川が1河川だけの場合は「単河川型」、複数の場合は「複数河川型」といった細分類も可能である。

### ④ 水面引込型

湖畔もしくは臨海の氾濫平野に立地する城下町で、いわば“臨水港湾都市”である。水面引込型は、湖畔に立地する「湖水型」と、臨海部に立地する「海水型」に細分類できるが、いずれも湖もしくは海から水を引き込んで濠や掘割を形成する。また、後背の低平地(城下町エリアや農地)では、河川活用例の濠や掘割も見られる。一方、「海水型」では、潮の干満差や高潮等に配慮した護岸の建設が必要となる。

## (3) まとめ

以上に示した通り、既往研究では明らかにされてこなかった、近世城下町における水系の設計論理の一端をインフラ整備の視点から明らかにすることができた。これらは、近世城下町の都市設計論理の全体像の解明に寄与する成果であると考えられる。

今後は、他の近世城下町を分析対象に加えるとともに、個別城下町の詳細分析に基づき、濠及び掘割の機能や治水・利水上の役割等を把握するなどして、類型をより精緻なものとするほか、濠及び掘割の幅員や深さ等の設計基準の分析等を通して、より詳細に設計論理を解明する必要がある。

## <参考文献>

- 1) 伊藤毅：近世大坂成立史論，p. 27，生活史研究所，1987.
- 2) 玉井哲雄：都市史における都市空間研究，日本都市史入門Ⅰ 空間，pp. 133-134，東京大学出版会，1989.

表-2 濠及び掘割に着目した近世城下町の類型

類型	濠・掘割				地形	特徴	主な機能	造成技術(例)	平面形状	代表例 (正統的類型)
	大分類 (主たる濠に着目し分類)	中分類 (主たる濠の形態に着目し分類)	大分類 (主たる濠に着目し分類)	中分類 (主たる濠の形態に着目し分類)						
I. 空濠・濠無し型 <高地防備都市>	I. 空濠・濠無し型 <高地防備都市>	山城	<ul style="list-style-type: none"> <li>○濠・掘割を設けず、もしくは空濠のみ。</li> <li>○城下町には自然河川やため池等から用水を導水。</li> </ul>	防脚	掘割	不整形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇頂上有利な地形に堀割を築く可能。</li> <li>◇城下町の水路を確保する必要あり。</li> <li>◆水運及び陸運へのアクセスを確保する必要あり。</li> </ul>	備中松山		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○小川や谷地を堰き止め、ため池を造成し、それらを水源として圃田・田・桑・掘割を配置して、高低差を利用して水を回す。</li> <li>○濠・掘割は下流の低平地(城下町や農地)の用水源としても利用。</li> <li>○水源を得られず、場合は空濠。</li> </ul>	防脚、用水源	小川や谷地の堰き止め 谷地の堀割 台地もしくは低平地との境界部の堀割	不整形 不整形 不整形 不整形・矩形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇台地や丘陵部の軍事上比較的有利な地形に堀割建設が可能。</li> <li>◇平地の高層地・宅地等の確保が可能。</li> <li>◇(台地)上や尾根筋を境とする(多)街道などの防壁へのアクセスが比較的良。</li> <li>◇水源確保のためため池の建設が必要(ため池を濠・掘割としても活用)。</li> <li>◆水源を雨水で構成する場合は水質の確保が必要。</li> <li>◆水運に配慮して高低差(地形)に細心の注意を払った濠・掘割の建設が必要。</li> <li>◆水運へのアクセスを得るために、城下町を台地(低平地)に建設し、近郊の濠(河川)へのアクセスを確保する必要あり。</li> </ul>	郡山		
II. 河川活用型 (a)河川・N(複数河川) <低地防備都市>	II-1. 河川活用型	盆地、 扇状地、 三角州、 氾濫平野	<ul style="list-style-type: none"> <li>○河川を濠・掘割の水源として活用。</li> <li>○濠・掘割は下流の低平地(城下町や農地)の用水源としても利用。</li> </ul>	防脚、用水源	河川をそのまま活用	不整形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇水源確保が容易。</li> <li>◇河川の付け替えや分水等の大規模工事が不要。</li> <li>◇河川前運へのアクセスが比較的良。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆排水対策が必要。</li> <li>◆瀬河のためこの瀬の設置や大規模な改修が必要。</li> <li>◆低平地の宅地造成(埋立や干拓等)が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	岡山		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○河川をそのまま濠・掘割として活用。</li> </ul>	防脚、排水及び 周辺の宅地造成	低平地の濠・掘割の堀割	矩形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇洪水時の水割リスクが軽減。</li> <li>◇田間道を活用することで濠・掘割の閉鎖工事等の負担が軽減。</li> <li>◇河川の付け替え工事が不要。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆低平地の宅地造成(埋立や干拓等)が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆付け替え後の河川等と河川前運へのアクセスを確保(または再構築)する必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	久保田		
III. 河川活用型 (b)河川・N(複数河川) <低地防備都市>	III-2. 旧河川型	盆地、 扇状地、 三角州、 氾濫平野	<ul style="list-style-type: none"> <li>○近郊の河川から分水して濠・掘割を形成。</li> </ul>	治水、防脚、 用水源	河川の付け替え →旧河川の活用	不整形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇洪水時の水割リスクが軽減。</li> <li>◇分水を農業用水等として活用可能。</li> <li>◇濠・掘割を合理的に配置可能。</li> <li>◇水源確保のために掘割・分水掘割・導水路等の建設が必要。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆低平地の宅地造成(埋立や干拓等)が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆付け替え後の河川等と河川前運へのアクセスを確保(または再構築)する必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	米沢		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○近郊の河川から分水して濠・掘割を形成。</li> </ul>	防脚、排水及び 周辺の宅地造成	低平地の濠・掘割の堀割	矩形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇洪水時の水割リスクが軽減。</li> <li>◇分水を農業用水等として活用可能。</li> <li>◇濠・掘割を合理的に配置可能。</li> <li>◇水源確保のために掘割・分水掘割・導水路等の建設が必要。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆低平地の宅地造成(埋立や干拓等)が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	米沢		
IV. 水運引込型 <臨水港都市>	IV-1. 潮水型	湖相の氾濫平野	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湖から水を引き込んで濠・掘割を形成。</li> <li>○後岸の低平地(城下町や農地)では旧川活用型も併用。</li> </ul>	防脚、排水	埋め残し	不整形・矩形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇水源確保が容易。</li> <li>◇水運へのアクセスが良。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆後岸の宅地造成(埋立や干拓等)の工事が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆後背地では別途水運の確保が必要。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	勝野		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○海から水を引き込んで濠・掘割を形成。</li> <li>○後岸の低平地(城下町や農地)では旧川活用型も併用。</li> </ul>	防脚、排水及び 周辺の宅地造成	低平地の濠・掘割の堀割	矩形	<ul style="list-style-type: none"> <li>◇水源確保が容易。</li> <li>◇水運へのアクセスが良。</li> <li>◆平地もしくは平坦地となることから、比較的大規模な濠の建設が必要。</li> <li>◆後岸の宅地造成(埋立や干拓等)の工事が必要(過剰・過放・過たが閉閉もしくは埋め残した排水路を市道等として活用)。</li> <li>◆後背地では別途水運の確保が必要。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> <li>◆街道を引き込む必要あり。</li> </ul>	小倉		

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阿部貴弘・中川恵・松野祐太・田中滋夫・伊藤毅・篠原修	4. 巻 44
2. 論文標題 濠及び掘割に着目した近世城下町の類型化の試み	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 土木史研究講演集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 阿部貴弘	4. 巻 769
2. 論文標題 インフラから解き明かす近世城下町町人地の設計論理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 KIKUHARA Ayano, ABE Takahiro	4. 巻 77
2. 論文標題 A STUDY ON HISTORICAL TRANSITION IN THE USE OF WATERFRONT OF KANDA AND NIHONBASHI RIVERS	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Japan Society of Civil Engineers, Ser. D3 (Infrastructure Planning and Management)	6. 最初と最後の頁 I_483 ~ I_499
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2208/jscejipm.77.5_I_483	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菊原綾乃・阿部貴弘	4. 巻 63
2. 論文標題 神田川及び日本橋川における水辺空間利用の歴史的変遷に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 土木計画学研究発表会・講演集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 實方琢人・阿部貴弘	4. 巻 64
2. 論文標題 近世城下町における水系の設計論理に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第64回日本大学理工学部学術講演会予稿集	6. 最初と最後の頁 327 - 328
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ABE Takahiro、MATSUSHITA Naomichi	4. 巻 76
2. 論文標題 A STUDY ON THE DESIGN PRINCIPLES OF NISHIMI DISTRICT IN THE CASTLETOWN OF IWAKUNI	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Japan Society of Civil Engineers, Ser. D2 (Historical Studies in Civil Engineering)	6. 最初と最後の頁 1~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2208/jscejhsc.76.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋一希・阿部貴弘	4. 巻 63
2. 論文標題 近世秋田における城下町設計論理に関する研究 - 久保田・横手・大館を対象として -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第63回日本大学理工学部学術講演会講演集	6. 最初と最後の頁 377-378
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤賢一・阿部貴弘	4. 巻 63
2. 論文標題 日本海沿岸における近世湊町の都市設計論理に関する研究 - 土崎・酒田・新潟・三国・敦賀を対象として -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第63回日本大学理工学部学術講演会講演集	6. 最初と最後の頁 322-323
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野みさ子・阿部貴弘	4. 巻 63
2. 論文標題 近世城下町大坂の水害及び水害対策に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第63回日本大学理工学部学術講演会講演集	6. 最初と最後の頁 371-372
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江口真由・阿部貴弘	4. 巻 63
2. 論文標題 『徳川実紀』にみる江戸時代前中期の水害対策に関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第63回日本大学理工学部学術講演会講演集	6. 最初と最後の頁 373-374
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部貴弘・松下直道	4. 巻 38
2. 論文標題 近世城下町岩国の錦見地区における城下町設計の論理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 土木史研究講演集	6. 最初と最後の頁 189-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部貴弘・中川恵・松野祐太・田中滋夫・伊藤毅・篠原修
2. 発表標題 濠及び掘割に着目した近世城下町の類型化の試み
3. 学会等名 土木史研究発表会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 菊原綾乃・阿部貴弘
2. 発表標題 神田川及び日本橋川における水辺空間利用の歴史的変遷に関する研究
3. 学会等名 第63回土木計画学研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 實方琢人・阿部貴弘
2. 発表標題 近世城下町における水系の設計論理に関する研究
3. 学会等名 第64回日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋一希・阿部貴弘
2. 発表標題 近世秋田における城下町設計論理に関する研究 - 久保田・横手・大館を対象として -
3. 学会等名 第63回日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤賢一・阿部貴弘
2. 発表標題 日本海沿岸における近世湊町の都市設計論理に関する研究 - 土崎・酒田・新潟・三国・敦賀を対象として -
3. 学会等名 第63回日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野みさ子・阿部貴弘
2. 発表標題 近世城下町大坂の水害及び水害対策に関する研究
3. 学会等名 第63回日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江口真由・阿部貴弘
2. 発表標題 『徳川実紀』にみる江戸時代前中期の水害対策に関する研究
3. 学会等名 第63回日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部貴弘
2. 発表標題 近世城下町岩国の錦見地区における城下町設計の論理
3. 学会等名 土木学会土木史研究発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------